

集團の全体性の問題

安 西 文 夫

一

最近のアメリカ社会学を中心として社会集團を動的全体として把握しようとする動向がしだいに増大してきたようにおもわれる。動的全体としての集團の把握は従来の類型学的な固定的な集團概念、ないし集團についての要素分析的なアプローチとまさに対立する立場から提唱される。一応独立のものとして抽象的に集團が把握されようとしたのに対しては、いずれの集團も特定の環境のなかに必然的な位置づけをもつものとして *situational* な状況において把握されようとする。質的差異によつて諸事象のあいだに深い溝渠をほり集團の形態について多くは二分法的な分類を認識の手段としてではなくその目的とするような旧型の類型論的な行きかたに対しては、そのような質的差異を現出する發生的な事情を究明してそれらのあいだの事実におけるないし論理的な関連を明らかにしようとして計量的な方法が好んで用いられる。集團の実在性がみとめられる場合にも要素分析的なアプローチの結果として集團的事実がその構成要素としての個人の側からの觀察、あるいは集團現象に共通に見られる心理的要素の強調、さらには集團そのものが問題とされているまさにそのときにせいぜい集團を環境とする個人についての考察におわつたのに対しては、集團の全体性の側に力点がおかれるようになってきた。〔(1) 15-16〕^註

集團についてのとりあつかいのこれらの変化はいうまでもなくたがいに

集團全体性の問題

二（九八一）

論理的にむすびついているのであつて、これらを含むする全体の動向を私は「集團研究の新たな段階」とよぶのである。ところでこの動向をもつとも端的に象徴する動的全体としての集團の構造とはいかなるものであるのか。またその全体性が強調されねばならないということとはなにを意味するのであるか。

註「〔内〕」の中の数字は論文末尾の文献の通し番号を、外の数字はその引用ないし参照の頁数をしめす。

集團の全体性の問題はその實在性の問題と密接なつながりをもつ。たとえば集團の全体性の否定はつねにその實在性の否定をともなっている。しかしレヴィンも指摘するように「『實在』」についての論義は性質上形而上学的に見え、したがつて経験科学にもちこまれることが期待されないといえよう。ところが実際には實在、非實在の論義が経験科学においてきわめて一般的に行われ科学の發達に積極的にも消極的にも大いに影響をあたえてきた。或るものを「實在しない」と断定することは科学者にとつてそれが「限界をこえる」と宣言することにひとしい。何かに「實在」をみとめることはこれを研究の対象として考察することを科学者の義務とする。」〔（2）189-190〕集團についても例外ではない。集團が實在するか否かの問題はもとと形而上学の問題であるであらう。實在そのものは經驗的認識の彼岸にあるものであり、經驗的認識によつて把握されるのは単にその一部ないし一部の側面であるにすぎないからである。それにもかゝらず集團が實在するか否かの断定はその科学的対象としての資格に影響し、集團の全体性を否定しようとする社会学者はつねにその實在性の否定に根拠を求めようとしたのである。レヴィンはカッシーラの主張として、物理学の歴史を通じて、原子、電子その他そのときどきに物質の最小の部分と考えられたものの實在についての論義が週期的におこつたとし、それに対して社会科学においてはその實在が疑われたのは通常部分ではなくて全体であつたという。

〔（2）191〕

その實在を疑われた全体の例として集團を挙げることができる。全体としての集團を構成する部分としての個人が対置されるのが通例であつた。従来、集團と個人の關係は全体と部分の關係に対応して考えられることが多かつた。しか

も多くの場合、これらの実在性に関してはそのいずれか一方のみがこれをもつものとされるのである。こゝに集団をめぐる實在説と名目説とが対立することとなる。すなわち前者は集団を現実に存在する統一体 (a real entity) としてみとめようとし、後者はそのような実在性をもつものは個人であつて集団は単にそれらの個人の集群にすぎず、それ自らの実在性を有するものでないと主張する。したがつて集団構造や集団行動についての論議は此喩的で、幻想的で、有害な種類の擬人法でしかないと考えられ、集団の概念はせいぜい認識のために構成された a construct であるか、あるいは社会学者の一の幻影でしかないとされる。この後者の主張の典型的なものは「集団幻想説」"group fallacy" である。〔(3), (4)〕

「集団幻想説」が心理学者によつて提唱されたのはけつして偶然ではなかつた。したがつて集団の實在にもとずいてその全体性を強調する一部の社会学者の強い抵抗をうけざるを得なかつた。すでに一九二〇年代にジョン・マーキーはこのアトミスティックな考えに体系的な論駁をくわえて、「集団幻想説の幻想」(fallacy of the group fallacy) を指摘した。^註

註 その論旨によると

- (一) 集団が一の現実 (a reality) であること。これについては提唱者オールポートといへども否定するものでないとする。
- (二) 集団が社会的相互作用の統一であること。集団のこの統一は社会的行為の相互關連的で相互依存的な体系においてながめられねばならない。社会学を集団および文化に関する研究と規定する社会学者自らが、文化を構成する相互作用と相互關係において集団を考えるよりは、これを生物学的有機体のよせあつめとしか考えない。用語の社会学的な意味における集団をなすところのものはそのような生物学的有機体であるのではなく、それらのなす相互關連的な行為なのである。
- (三) 集団はわれわれの宇宙における別個の水準の対象 (a distinct level of object) であること。集団を構成する行為はその

集団の外部には存在せず、個人それ自らのうちに存在するのでもなく、たゞ集団の部分としての個人の中に存在する。逆にいえば個人は集団の成員としてのみ人間としての存在を獲得する。集団が崩壊すれば個人もまた破滅する。オールポートの最大の過誤は集団現象を孤立した個人に還元するところにある。彼のいう個人は集団の外部にある架空のものでしかない。彼の立

集団全体性の問題

四
(九八三)

(四) 自然的対象としての集團の把握は、社会心理学者によつて通常用いられる *frame of reference*、まして心理学者のそれとは異なる、それ独自の *frame of reference* を必要とすること。心理学者の考えかたをもつて集團を観察することはあたかも顕微鏡をもつて象を見ようとするものである。〔(5) 149-151〕

いうまでもなく今日においては實在説も名目説もともにあまりに単純な理論として批判され、そのまゝの姿では自己を主張し得なくなつた。マーキーの主張点は十年を経てランドバークによつてより緻密にまたより体系的に問題とされている。もともと彼にとつては特定の単位や範疇すらが一の技術上の、ないし便宜上の問題でしかなく、特定の単位は統一体として實在するとも、あるいは単に比喩的なものともいえるのである。すなわち単位は社会的その他の諸条件をもつ特定の類型の有機体による特定の反応様式にほかならず、「實在」「現実」「全体」「部分」の唯一の標準は多数の人間の適応の一致なしに合致によつて証明された、選択された反応の適応の便宜でしかない。集団や個人もまたその例外ではない。それらはともに内在的な實在性をもつものではなく、もとよりたがい^{（1）}に他を排して自らにのみ終極的な實在性を主張し得るものではない。したがつて彼によれば社会学者が今なお従事している「個人——集団論義のような論争はほかの科学においては消滅した。原子や電子、分子や細胞、細胞や複合性の程度を異にする有機体などのいずれが『實在性』を、またいずれが『比喩性』をもつかの問題は大部分の科学の世界では滑稽で意味のないものである。：

：これらの範疇の或るものにほかのものを除外してその根源のないし内在的な『實在性』を強調することは、科学においてはことばという象徴の本性についての原始的な觀念の証拠と見られるだけである。」〔(6) 194〕

続けて「われわれ

は社会科学における『集團幻想』の論義に対して同一の態度をとる」というランドバークは「集團幻想」がゆるされるならば「個人幻想」の主張をも同一の理由にもとずいてみとめねばならないと考える。『個人』も『集團』もともに現象に対する感覺的反應をしめす語である。その意味ではこれらは同様に『比喩的』であるとともに同様に『實在的』である。同じ理由にもとずいて個人の行動を口にするのとまさに同一の意味においてわれわれは集團の行動を口にするであらう。』〔(6)166〕という。個人が特に根源的な實在性をもつという見解の根底は「人間」「人」「個人」という語が、「集團」「公衆」「コミュニティー」ないし「国民」というような語にくらべて「實在的で可觸的な」行動の主体であるところの統一體を表示するという感じによることであつて、これは主として言語上のなれの結果にほかならない。〔(6)166〕これに対して集團の統一體が同様にとりあつかわれない理由としては、集團の行動機構の所在場所 (locus) が充分に決定され得ないことによると考えられる。すなわち個人の場合には「心理」が頭脳に位置するものと想定され、しかもこの單純な言語上のなれがきわめて確立しているために、個人行動によることで「實在性」をあたえて何らの問題がおこらない。この親近感は好奇心、疑問、その他の緊張^{テンション}を鎮静させるのであつて、これが「實在性」という語によつて通常意味されるところのものである。集團の場合にはその行動機構のシートはどこにあるのか。「集團心理」(group mind)を想定しても適切な解答にはならない。

しかし言表上のなれによつてよろこんで「實在性」をあたえられる個人に対して、集團の「實在性」を主張することに社会学者が遠慮がちであつた事實のいま一のしかもより中心的な理由がある。それはランドバークによれば前世紀における社会有機體説のかんばしからぬ歴史である。それ以後、社会有機體説的な構想はもちろんのこと、一般に類推そのものが、「知的タブー」として嚴重にしりぞられるのであるが、このことが集團の全体性とその現實性の主張につながりをもつという連想があつたといえよう。私はこの問題をあらためて次節で論じたいと思うが、要するに物理学の場合とは対蹠的に、社会科学においてはその實在が疑われたのは通常部分ではなくて全体であつたとレヴィンの指摘する

集團全体性の問題

六 (九八五)

事実を以上のように説明することができよう。

集團の實在説と名目説について一応結論的にいえば、集團の存在性を強調するために實在を集團のみの特権であると主張する社会学者があるとすれば、これを個人にのみとめようとする主張とともに誤りをおかすものである。一方に實在がみとめられるならば他方にもそれはみとめられねばならない。要するに認識の焦点の集中するところに問題の単位が成立するのであつて、集團も個人もその意味における全一的統一をもち、そのかぎりでの實在性をそれぞれもつのである。周知のようにクローリーはすでに今世紀初めに、分離された個人とは経験によつては把握されない抽象であり、同様に諸個人から隔絶したものとして見られる集團も単なる觀念的な抽象にすぎず、人間生活が見かたの相違によつて単に個人的にあるいは集合的に見られるものと理解した。一の現実 (the one reality) の二の側面として社会性と個人性をみとめようとするマキーヴァーもこの考えに賛同するものである。集團と個人とを弁証法的展開のそれぞれの過程とみる見解もこれに近い。しかしこゝに重要なことは姿を変えた名目説が今日も根強い勢力をたもっている事實である。それは今日の社会学の主流の根底をすらなしているほどである。このことは代表的な集團概念についての規定を見てもわかる。また表面としては名目説をすてた社会学者が現實に集團現象を調査するとき名目説への退却を暴露することによつても知られる。集團と個人の關係についての考察において徹底的な処論を展開するのはレヴィンとランドバークであろう。ゲシュタルト理論家と行動主義者とはその意見における若干の差異はまぬかれないが、基本的にはきわめて類似する。ところで二〇年代に心理学者から集團の非實在にもとづくその幻想を非難された社会学者は、今日にいたつてあらためて心理学者レヴィンらに全体性をふくむ集團の實在を教えられねばならないように見うけられる。

二

集團構造の全体性、一般的には社会構造の全体性を問題にすると、すくなくとも二の側面からの非難を覚悟しなければ

ばならないように思われる。一はそれが社会有機体説的な構想と本質的なつながりをもつという論拠にもとづく非難であり、もう一は政治的な「全体主義」の主張との連想にもとづく非難である。しかもこの二の非難は集団構造の全体性の問題を無視、回避させるのに充分の力をもっている。しかしこれらの非難は当を失していることが強調されねばならないし、今日の社会学を支配している要素分析的なアプローチとともに集団についての妥当な研究、調査に有害な考えかたとして排撃されねばならない。

社会有機体説が集団をふくむ社会構造の全体性を強調したことはいうまでもない。前世紀なかばに異常に発達した生物学の強い影響をうけた社会有機体説に見られるように、社会の全体性が生物有機体の肢体、器官、組織、細胞などの諸部分の間の関連とそれにもとづく全一的統一としその有機体の全体性に類推された。静的な関連においては社会の連帯性が有機体の内部の諸部分の間の相互依存性に類推された。動的な発達についても生物有機体の自然生長性ないし進化の原理がそのまま社会の発展の説明に利用され、後者の突発的、変革的でなく漸進的、改良的な変化が宇宙をつらぬく基礎的原理とされたのである。連帯性と自然生長性とは静、動両面の特質であり、同時に生物におけるように本質的にむすびつくところの、すべての全体に共通する基本的な成立、発展の基準と考えられた。この社会有機体説の構想は生物学の発達、特に進化論の展開と相まつてひろい支持を得たのであるが、それが支えられていた社会的基盤の変化とともに徹底的な批判をくわえられ退陣せざるを得なかつた。〔I〕〔II〕社会有機体説がひろく支持され、当時の社会思想史上で支配的であつたため、その凋落もはげしい渦紋をのこさないではおかなかつた。社会有機体説的構想はそれ以後、ランドバークもいうように「知的タブー」として禁忌されたのであるが、それはもつと深刻な副産物の一、すなわち「類推」一般に対する不信ないし忌避を生んだ。

類推という認識様式の性格について私はかつて全面的に否定的であつた。〔I〕〔II〕その場合、主として念頭にしていたのは社会有機体説的な類推の論理的欠陥であつた。いうまでもなく一般的にいって質的差異の溝渠によつてへだてられ

集團全体性の問題

八（九八七）

た諸過程がたがいに混同されたり、一の過程についての知識が他の過程にそのまま適用されたりする場合に、まず期待されねばならないものは誤謬であるであろう。ある知識が質的に異なる過程について利用される場合は、後者について早急な認識の達せられる近道がえらばれている場合にかざらない。後者について特定の主張をするのに好都合の知識が援用される場合がさらに多い。いずれの場合にも、まさに問題とされている過程の特殊性が抹殺される危険はきわめて大きい。このことは特に低次の現実過程に相應する認識を高次のそれに適用するパースペクティヴな類推の場合と、その逆に高次の現実過程に相應する認識を低次のそれに適用するアレゴリックな類推の場合とのいずれにおいてもいえることである。しかも類推は人の思考活動における平易をこのむ傾向に迎合する方法であり、認識を安易に獲得しようとするものがこのんで類推を用いることも否定され得ない。「類推の魔術性は認識の平俗性を好む。」〔（7）61〕類推の魔術性に対する私の警戒はいさゝかも寛和されていない。私はそれを憎み、またおそれる。

ところで社会有機体説は社会の全体性を説明するのに、これと質的差異の溝渠をへだてた生物学的過程についての認識をもつてするのであるが、このことから社会的全体の概念そのものが本質的に有機体説的構想に根拠をおくという見解を生んだ。林恵海教授は二十数年以前に社会的全体概念についての深遠な論文において「社会学的普遍性の論理的構造が意識的無意識的に其根拠に於て有機体説から基礎付けられている。」とも、「社会学的普遍概念が有機体論の論理と密接し否有機体の論理から基礎付けられている。」ともいわれている。〔（8）25〕しかし社会の全体性をみとめこれを強調することは社会有機体説的論理に基礎をおく必要はなく、あるいはそれに基礎をおくことによつて論証され得ないのである。それらの論理的根拠は異なり得るのであつて、たまたま社会有機体説も社会の全体性を強調したということによつてそれらが本質的にむすびつく論拠にはならない。「有機的」といわれる全一的統一は生物学的過程に属し、これに対して社会的な全体概念の成否の問題はこれと次元を異にしそれ自らの特殊性をもつ過程における問題である。それは質的に異なる過程についての認識をもつてしては、すくなくともそれだけでは解決し得られる問題ではない。社会有

機体説を支持する立場にあつた人々の中で、社会的事実を「超有機的」と呼んだ人々はすでにおぼろげながらそれが生物学的過程を絶した領域に属することに気がついていたわけである。社会学の後進性は先進諸科学の慣用する用語や概念を利用し得るといふ幸運とともにそれらの用語や概念に束縛されるという不幸をもに味あわねばならなかつた。そこには類推の魔の手がしのびよる危険がきわめて大きいものがあつた。したがつて社会学の独自の用語や概念がその独特の対象領域に即応して設定されることがのぞましいことでなければならなかつた。「知的タブー」としてしりぞけられた社会有機体説的な用語や概念はもちろんのこと、機械論的な体系や心理学から借用されたそれさえ追放さるべきであつたのであらう。しかし現実にはそれらの多くが残されたし、今日においてもひろく用いられている。しかしこれらの用語や概念のすべてが類推として利用されているのではないのである。このことは林教授の示唆された、社会的全体性の概念が社会有機体説的論理を根拠とするという考えかたにも関連をもつ。約言すれば社会的全体性ないし集團の全体性の概念が単なる類推でなく、社会的な過程の認識に立脚してそれ自らの中から成立することを私は主張したいと思う。社会有機体説的構想が「知的タブー」として忌避されることをこの構想の思想史上におけるかんばしくない経歴によると考えるランドバーク自らは類推一般の効用を否定するものではない。彼は「いうまでもなく類推は人が新しい問題を考究する場合の最もみのりの多い方法であつた。」といふ、「明らかに関連のない現象間に一貫した類推を行うことによつて決定的な前進が達成されたといふことが物理学ではしばしばおこつた。」といふアインシュタインおよびインフェルトのことばを引用している。〔(6) 198〕 また「われわれは新しい事態に直面して、これと、われわれが親近である事態との間に或る種の類似を発見し得るのでなければ、まったく無力である。」とまでいふ、「科学的方法としての類推に対する唯一の適法の異議は目的に対する手段としてよりはそれ自ら目的として無抑制に無批判に使用されるところにある。」として類推の役割をたかく評価するのである。〔*ibid.*〕 彼は集團の概念規定についてすらあたかも類推にたよるかに見られる試みをあえてする。すなわち「その構造とその部分相互間の関係を決定するだけでなく、その周囲の世

集團全体性の問題

一〇（九八九）

界に関して全体としてそれを行動させる多かれ少かれ確定的で不連続的な (definite and discrete) 秩序と統一、換言すれば pattern」というチャイルドの、有機体についての規定を「社会集團についてのきわめて明哲な有用な叙述」と見るのである。〔(6) 169〕彼にとつては有機体についての現代の規定は往年の有機体説的な類推とは異なり、社会的全体の規定に有用な示唆をあたえると考えられている。しかし類推一般に対する懷疑論者はこのランドバークの新たな類推に対してもやはり否定的であろうし、また社会的全体概念と社会有機体説的構想との関連を本質的と見る論者はその主張の新たな例証と解するであろう。ランドバークの真意はどこにあるであろうか。私は次のように理解する。

類推は質的差異の溝渠にへだてられた異なる過程についてその一方に関する認識をもつて他方のそれに適用するところに成立する。それらはあくまで質的差異をたもちながら他面において共通の資質をもつことがないであろうか。たとえば集團の全体性が有機体の全体性や心理的統一の全体性や物理的統一の全体性とともに全体性としての共通の性格をもつのではなからうか。しかもこれらのそれぞれの領域における全体性の問題が現代諸科学の発達によつて究明されつゝあることはほとんど確言されてよい。したがつて或る過程について究明された全体性が他の領域について全く縁のないものであるとは断定できないし、むしろいずれの過程についてもみとめられる全体性はその領域についても妥当するのではないかと疑つてみるのが健全な行きかたであろう。このような行きかたから集團の全体性についての規定がたとえば有機体のそれによつて表現されているかぎり、これらの規定を関連させて理解することはゆるされることであろう。それはすでに単なる類推といえないものである。実に集團の全体性を規定する条件と性格とは質を異にする諸種の全一的統一にわたつて妥当するもののように思われる。したがつてランドバークの試みは単に類推によつて集團を規定しようというのではなく、種別を異にする全体性が当面その問題とする集團の全体性と共通に規定され得ることを指摘しようとするのである。

われわれは今では集団や社会の「構造」が物理学的、生物学的、心理学的な用語の単なる転用として、あるいはそれとの単なる類推として用いられるのではないことを確言できる。それは社会学的な特殊の意味内容をもつ独自の用語として用いられるとともに、この用語をもつて指示される質的に異なる他の領域での場合と関連を絶したものである。それは現実における関連とともに概念上の関連をふくむ。イギリスの社会人類学者レイモンド・ファースは事態をよく把握している。「社会の構造の概念が、構造の一般的概念と合致すべきものであるならば、特定の諸条件をみたさねばならない。それは社会生活の諸要素がたがいに関連するという状況において、諸部分の一全体への秩序づけられた諸関係を問題としなければならない。これらの関係は一が他の上にきずきあげられているというようにみられねばならず——それは一連の序列を異にする複合体である。」〔(9)30〕この表現の中には社会構造の全体性の基本概念がしめされている。この基本概念はいうまでもなく集団構造についてもあてはまる。

集団の全体性は集団のいわば部分の間の相互依存性によつて規定される。この部分間の相互依存性は行動主義的には行動の相互作用ともいえよう。いずれにしてもこれによつて成立する全体である集団は一のゲシュタルトとして把握されねばならない。コフカは集団を社会学的集団と心理学的（行動的）集団にわけて考えているのであるが、この前のものは後のものとともにやはり「ゲシュタルトであることを帰結しなければならない。」〔(10)649〕とのべている。ケーラー以来「動的全体」(dynamic whole)の概念の規定はその諸部分間の依存性に基礎をおくものとされてきたが、レヴィンは「この規定は物理的、心理学的、社会学的諸全体によく妥当する」〔(2)305〕という。彼においてこの社会学的全体は集団をふくんでゲシュタルトとして把握されたことはいうまでもない。ゲシュタルトないし動的全体としての集団は要素分析的なアプローチによつては把握され得ない。このことは集団の概念規定に直接に影響をおよぼす。要素分

集團全体性の問題

一二（九九一）

析的なアプローチをえらんだ社会学者は集團をその構成要素、特に個人の存在ないし個人の資質から、しかも多くの場合に諸個人の共通にもつ性格や属性すなわち構成要素の類似性に集團の本質をもとめた。これに対してゲシュタルトとしての集團をみとめるならば、このことはゆるされることではない。この動的全体は他の種別の動的全体と同様に、全体としての資質をもち、これは構成要素の個々の資質のいずれからも、またその共通性からも、さらにまたその総和からも説明され得ない。レヴィンがいうように「全体はその部分の特性ないし部分の総和とはことなる特性をもつ。」〔2〕146〕すなわち全体はその部分の総和以上のものであるだけでなく、それは部分の総和とはことなるものなのである。〔ibid.〕集團は諸個人のよせあつめではなく、利害や意識の同一や性格や運命の類似をもつ諸個人の集りであるのではなく、結合の意欲や地位役割の共通によつて成立つものでもない。すすすすとそれだけではそれらは集團を形成しない。それらは多くの場合諸個人間に相互依存を成立させる条件を提供する可能性をもち、それだけ集團を形成する機会にめぐまれているとはいえよう。しかし集團はあくまで構成要素間の相互依存の關係によつて現出される動的全体なのである。

ゲシュタルトの内部の部分の存在性について規定される性質は集團内のそれについてもあてはまる。たとえば部分は特定の全体においてのみ存在性を獲得し、遊離されて単独に存在するとか、あるいはこれをそのまま、他の全体的統一のなかに移すとかということをやゆるされない。相互依存性の強い全体の内部の部分は分離されれば消滅しやすくなり、またこの遊離された部分を他の全体に移すときたとえその全体がこれを包容してこれを排除しなかつたとしても多少ともこの全体に変化を生ずることなくしてはそれは可能でない。したがつて部分は全体およびそれを取りまく環境のなかに situational な位置づけをもち、これによつてはじめてよく把握される。全体と部分および諸部分の間には functional な関連があり、それらはたがいに制約しあつており、この相互の関連を無視しては全体も部分も考えられない。集團と個人、集團内の諸個人の相互の關係も同様である。構成要素としての個人の性格や属性もこのような關係に支配される。

特定の時代において全一的統一を示している或る集団はそれ特有の性格や属性をもつ個人を包容し、この個人のしめす性格や属性はその集団を支えている諸制度、諸組織の機能や特性とともに歴史的限定をもつ。たとえ用語の上で同一ないし類似の名称をもつていても、現実の歴史的関連を有する場合をのぞいて一般化され得ない。全体と部分との結びつきはきわめて本質的であつて、これに対して超歴史的な概念の接合は意味をなさない。われわれは近代家族から社会的単位の最大の極限でもあつた未開社会の家族にいたるそれぞれの歴史的段階における特殊性をもつた家族を問題にする場合の方が、これらを超えた家族一般よりもより多くを把握する。それは単に後者の概念が抽象的であるからではなく、その抽象が現実の全一的統一の姿を破壊するからである。集団についての *situational* な把握は或る意味で歴史主義的とならざるを得ない。

ゲシュタルトとしての集団の特殊な性質は何であろうか。この点についてコフカは「集団は一定数のきわめて確定的な特徴をもつものであつて、きわめて特殊な種類のゲシュタルトである。」〔(10) 650〕とのべている。これに関連して彼の指摘する二の論点は傾聴にあたたいする。すなわち第一に集団によつて示されるゲシュタルトの強度 (*strength*) に非常な差異のあることである。ゲシュタルトの強度は部分の相互依存性の程度によつて規定されるのであつて、ゲシュタルトの性格が強いほど部分の各は他のすべての部分に依存し、この依存性は部分の各側面にますます影響をあたえる。集団の凝集性の強い未開社会では集団との連繋の喪失は分離された成員に死をもたらしることがある。高い強度を示す例を今日の社会において求めるならば諸種の競技のチーム・ワークに見られよう。それに対して相互依存性が稀薄で強度の弱い集団は今日枚挙にいとまがない。第二に、このように集団がきわめて低度のゲシュタルト的凝集性をしめすことのある事實は集団の第二の特性から生ずることである。集団は諸個人から成り、この諸個人はこの集団によつて大いに決定されるのであるが、もつぱらそうであるのではない。諸個人は非社会的な要素を包含し表出する。彼らは部分的には社会的な影響からはなれ、たがいに依存性をもたないこともあり得るし、また特定の集団とは別個に他の集団を人為

集團全体性の問題

一四 (九九三)

的に構成することによつて或る程度までこの新たな集團の性格を決定し、この決定が成員である諸個人の個性に深い関連をもつこともある。この個人の能動的な立場は集團に特殊な性格をあたえるものである。このことはメロディーのよ
うな強度のたかいゲシュタルトに比較するとよくわかる。作曲家の心の中には特定のメロディーに先行して或るいはこ
れから独立して諸音があるのではない。この場合にはメロディすなわち全体が全面的にその部分を決定する。〔(10) 650-
651〕

四

いまのべたことは集團の全体性の認容に対する政治的な意味における全体主義の主張との連想にもとづく非難のあた
らない事実を示唆するものである。この非難の論拠は全体性という用語の連想のみならず、全体性の認容がたゞちにそ
の構成要素としての個人の自由ないし能動性の否定を意味するという解釈におかれてるように思われる。事實は反対
に集團の全体性の認容は個人の自由や動動性を否定するものでないばかりでなく、むしろ個人の能動性、集團に対する
積極的なはたらきかけが集團の全体性の強度をたかめ、それに特殊な性格をあたえるのであつて、根本的にこの非難の
論拠は当を失しているといわねばならない。

政治的な意味における全体主義の主張が個人の自由を奪いとりその能動性を抹殺した事例はいくらも挙げられよう。
それは多くの場合個人を犠牲とする全体の強調を理念とし、事實においては一部の社会的階層の利益の擁護に全体性の
名をすりかえたものであつた。「全体」が特定の目的に利用されただけである。全体主義理論が多くの場合に社会有機
体説的な構想に基礎をおき、それと本質的な結びつきをもつたことこそは林教授の指摘がまさに妥当するであらう。フ
ァシズム・イタリーの労働憲章の冒頭の一句は「イタリー国家は一個の有機体なり。」という規定にはじまつていた。
ナチス治下の全体主義理論がいかに階級闘争を否定して協調ないし連帯をとくために、また社会の革命性を否定してそ

の自然生長性を理論づけようとして有機体説的説明にたよつたかは周知の通りである。これに対して集団の全体性の問題は、有機体的類推のような方法論の幼稚な水準や、特定の政治目的とは関係のない科学的な問題なのである。

文 献

- (1) 拙稿「集団研究の新たな段階」『人文研究』第四卷 第三号(1)
- (2) Lewin, K., Field Theory in Social Science, 1951.
- (3) Allport, F. H., "Group' and 'Institution' as Concepts in a Natural Science of Social Phenomena," Publications of the American Sociological Society, 1928, Vol. XXII.
- (4) Allport, F. H., "The Group Fallacy in Relation to Social Science," American Journal of Sociology, 1924, Vol. XXIX.
- (5) Markey, J. F., "Trends in Social Psychology," in Trends in American Sociology by G. A. Lundberg and others, 1929.
- (6) Lundberg, G. A., Foundations of Sociology, 1939.
- (7) 拙稿「類推の魔術性」『思想』昭和八年十二月号
- (8) 林恵海「社会学的普遍概念の有機体論的構造」『社会学雑誌』昭和五年五月号
- (9) Firth, R., Elements of Social Organization, 1951.
- (10) Koffka, K., Principles of Gestalt Psychology.